

財団法人松江市教育文化振興事業団  
埋蔵文化財課年報Ⅶ

平成14年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

# 石 田 遺 跡

## はじめに

石田遺跡は松江市浜佐田町、薦津町に所在する。鳥根県松江農林振興センターが実施している松江西部2期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（浜佐田トンネル）に伴い発見された。

遺跡は谷部（Aゾーン、Bゾーン）と丘陵部（Cゾーン）からなり、谷部では土器や石器、木製品などが多数出土し、丘陵部では弥生時代から奈良時代頃の建物跡が検出された。

## 調査の概要

### 谷部の調査

Aゾーン（谷の最奥部）では木組みの水溜遺構が検出された。周辺の出土遺物から古墳時代後期から平安時代始め頃の時期が推定される。遺物包含層から出土した遺物は、弥生土器、古墳時代から平安時代の須恵器、土師器、手づくね土器、土玉、耳環、瓢箪の加工品、漆器椀、板材など多岐にわたる。須恵器には墨書土器5点を含む。

Bゾーン（谷中部）では木杭列と板材などの木製品が集積している状況が確認された。出土遺物から古墳時代中期の所産と考えられる。遺物包含層からは弥生土器、古墳時代前期から中期を中心とした土師器、古墳時代中期から奈良・平安時代の須恵器、石斧や大形石包丁などの石器、大量の木製品（扉板、琴、杵、発火具、農具、槽、板材他）が出土した。

### 丘陵部の調査

Cゾーンでは合計8箇所建物跡、古墳時代の可能性のある墓壇（二段掘り）1基、こ炭焼土壇（自家消費炭焼穴）2基が検出された。

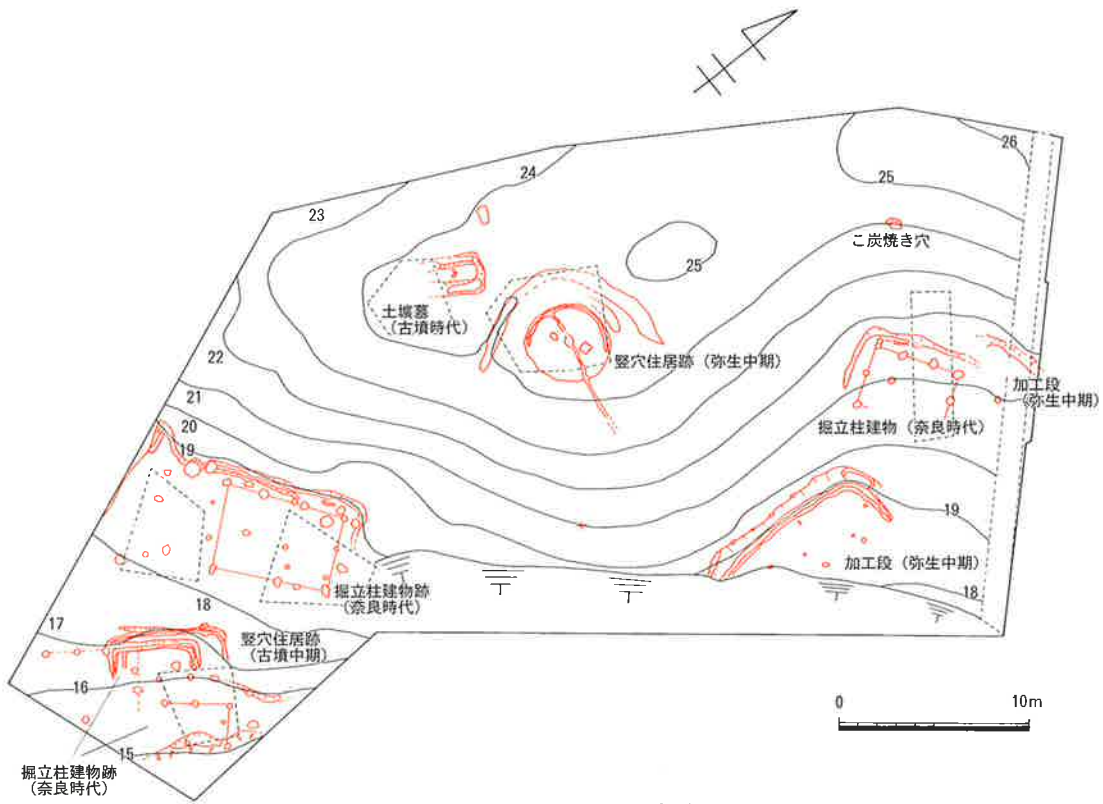
建物跡は弥生時代中期末、古墳時代中期、奈良時代の3時期がある。弥生中期末には尾根上に竪穴住居1棟、南東斜面に加工段2ヶ所が営まれていた。加工段の1つからは鉄斧が出土している。古墳中期のもの2棟は竪穴住居でいずれも床面の半分が流失していた。奈良時代のは3箇所とも掘立柱建物であった。

## まとめ

本遺跡は、南に開く狭い谷を標高20~30mの丘陵が取り囲み、尾根上からは西に薦津と浜佐田の低地を見下ろす場所に立地している。谷部は湧水が豊富にあり、古来より水場として利用され、湧水点の祭祀が行われた場所であったことが大形の琴や手づくね土器、土玉などの出土遺物からうかがわれる。谷部で出土した大量の遺物から、今回の調査範囲以外にも多くの住居が存在していたものと推測される。なかでも出土例の少ない弥生中期の鉄斧を所有できる集団がいたこと、りっぱな扉板を取り付けた高床式建物の存在、公の宿泊施設を表わす「宿」の文字を墨書した須恵器の出土など、各時代を通じて注目される遺跡である。

（瀬古 諒子）





石田遺跡Cゾーン調査成果図



尾根上の円形竪穴住居跡（北から）

# 犬丸遺跡

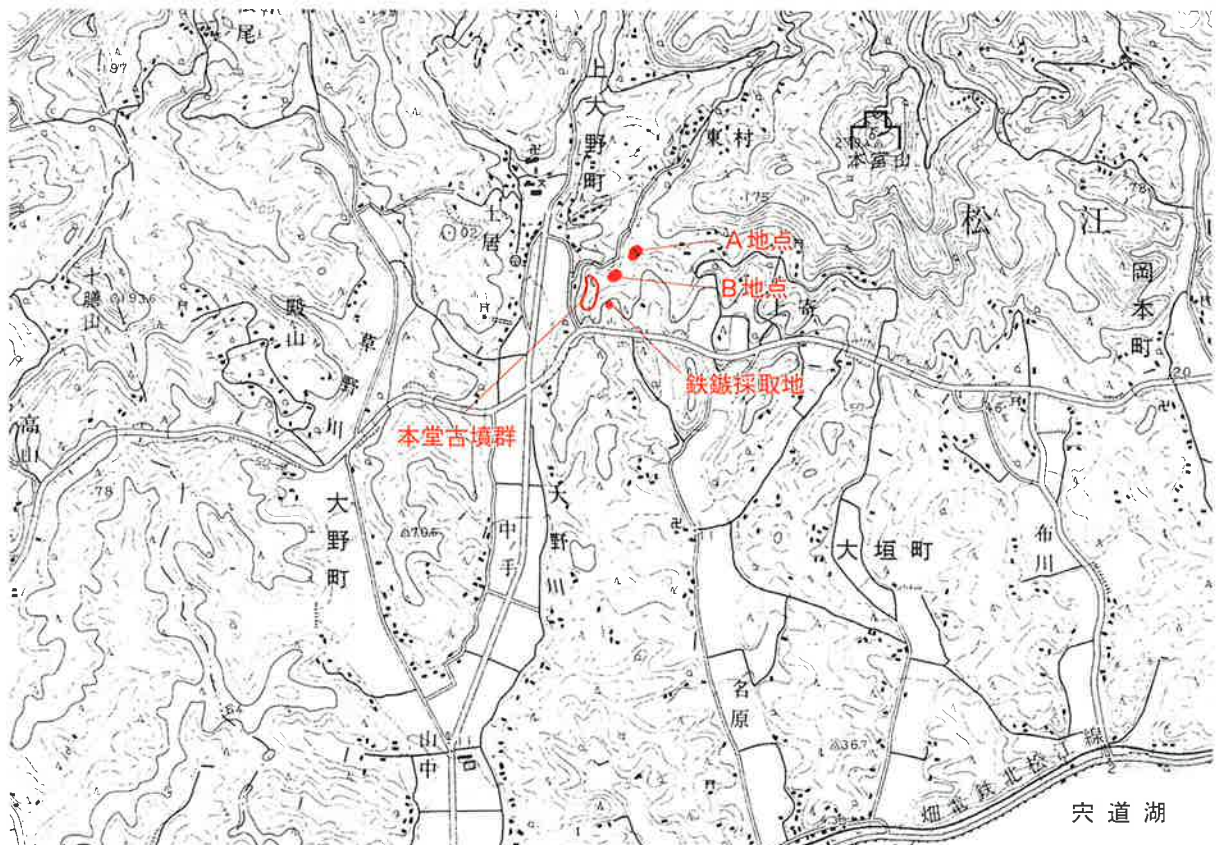
## 位置と環境

犬丸遺跡は、松江市上大野町字犬丸244他に所在する（第1図）。そこは松江市のほぼ西端で、南に宍道湖を見下ろす低丘陵上である。地元の人は字名「犬丸」を出雲弁で「えのーま」と発音する。

大野町は、草野川と大野川によってつくられた谷間の狭い沖積平地と、それを挟む東西の丘陵で構成されている。遺跡の数は多く、近いところでは、犬丸遺跡が所在する丘陵の尾根上約200m南方に2基の方墳、本堂古墳群がある。中世では、西方の谷に字名「土居」があって大野氏の館跡に比定されているほか、北東方向の本宮山には山城が築かれている。

## 調査に至る経緯

島根県斐伊川水道建設事務所が島根県水道用水供給事業（第2次拡張事業）を策定し、松江市教育委員会が工事予定地内の分布および試掘調査を実施した。その結果、A地点のトレンチから古墳の主体部および周溝と推定される土層を確認し、表面観察では山城の曲輪のような段状地形を確認した。また、B地点のトレンチでは古墳の周溝と推定される土層から土師器片の出土がみられた。これらのことから全面調査に至ったものである。



第1図 犬丸遺跡位置図 (S=1/25000)

## 調査の結果

犬丸遺跡の調査報告は印刷物として公表していないため、この場を借りて簡単に報告したい。以下で、A地点とB地点とに分けて報告する。

### ・A地点（第2図）

尾根上平坦面の古墳推定地から調査を開始した。その結果、試掘調査時に周溝と推定されていた溝状遺構S D01は浅く短いもので丘陵を区画するものではなく、埋葬主体と推定されていた溝状遺構S D02は底部が不整形なU字形で6.9mと長く、底面レベルは南へ下がり、埋土は炭混じりの黑色粘質土であることから、主体部では有り得ないことがわかった。以上の2本の溝状遺構は埋土が非常によく似ていることから、ともに周溝を構成するものではないかとも考えられ、2本の溝で囲まれた範囲の精査をおこなったが、何ら遺構を検出することはできなかった。2本の溝状遺構の中からは全く遺物が出土しなかったため時期、性格は不明である。

古墳推定地の東側平坦面も地山まで掘り下げたが、若干炭を含む土壌2ヶ所を検出したのみであった。土壌は浅いもので遺物はともなわず、時期は不明である。遺物は、表土中から須恵器片が5点出土したのみで、中世に関連するものは出土しなかった。

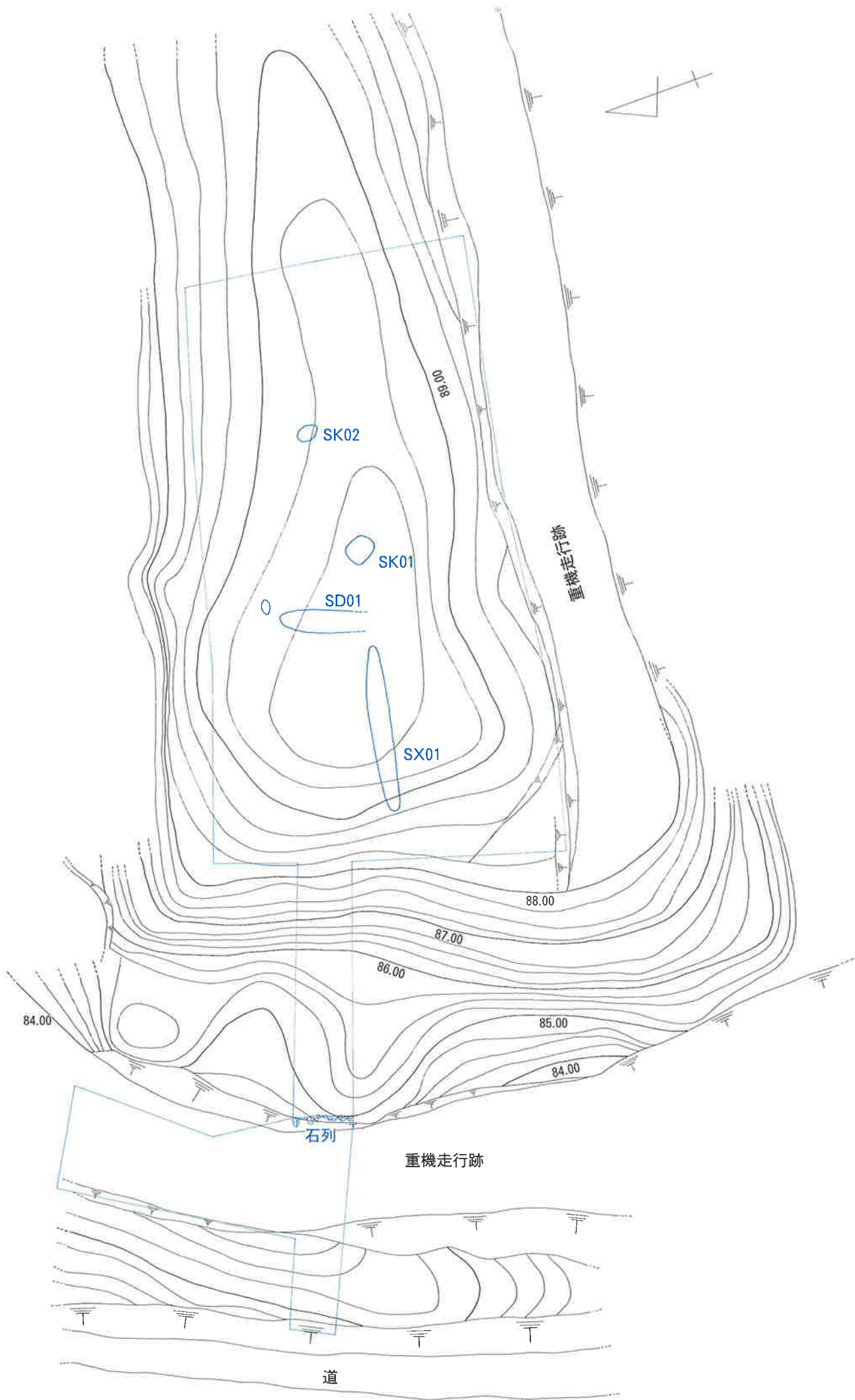
次に、山城の曲輪と推定されていた西側斜面の段状地形に幅2mのトレンチを掘って土層を観察した。紙面の都合上セクション図は割愛するが、尾根より一段下がった曲輪状の平坦面には地山の上に耕作土と思われる若干炭を含む濁淡灰褐色砂質土があり、西端では土留めの役割を持たされたと思われる石列が検出された。濁淡灰褐色砂質土層はかなり傾斜があって西方に下がっていたが、調査地周辺の耕作地をみると傾斜畑が多く存在していることから、かつて畑地として利用されていた場所であるものと推察された。濁淡灰褐色砂質土の上には明橙褐色土の盛土があったが、これは下方の道を造成した際に置いたものであろう。下方の道は調査地北方の畑地に通じているもので、部分的に客土して造成された痕跡を確認した。客土中からは須恵器片1点のほか肥料用ナイロン袋が出土したことから、昭和以降に造成されたことがわかった。道の西側下方では7世紀末頃の須恵器片多数と炭、焼土、ピットを検出して遺跡の存在が明確となったが、開発範囲から外れるため平面プランを検出するのみにとどめた。山城に関連するような遺構、遺物は全く出土しなかったため、斜面の調査はトレンチ調査だけで終了することとした。

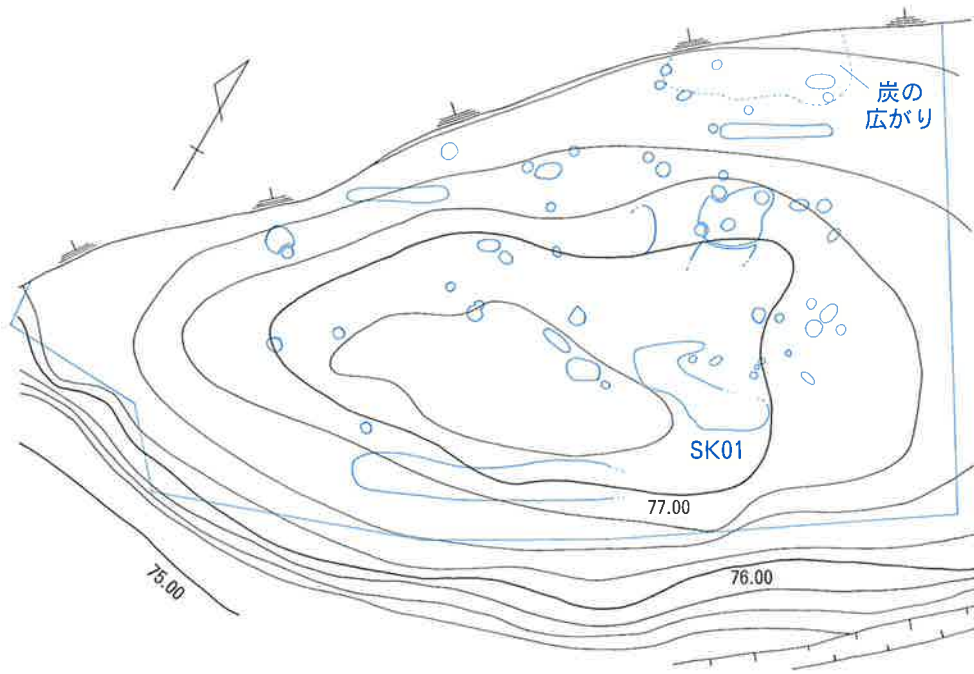
### ・B地点（第3図）

試掘調査で古墳の周溝と推定されていた遺構は、掘り進めると不整形な土壌となり、セクションからも古墳は存在しないことが判明した。調査範囲内を地山まで掘り下げて精査をおこなったところ、多数のピットや溝状遺構、土壌S K01のほか、北東斜面では焼土塊を多く含む炭の広がりが見出された。ピット群はいずれも浅く、形状からも木根の痕跡である可能性が高い。溝状遺構は3本検出したが、埋土には多少炭が含まれているだけで遺物は出土しなかった。炭の広がりには表土直下から検出されたもので、遺物はともなっていないが、比較的新しい時期のものとも推察される。

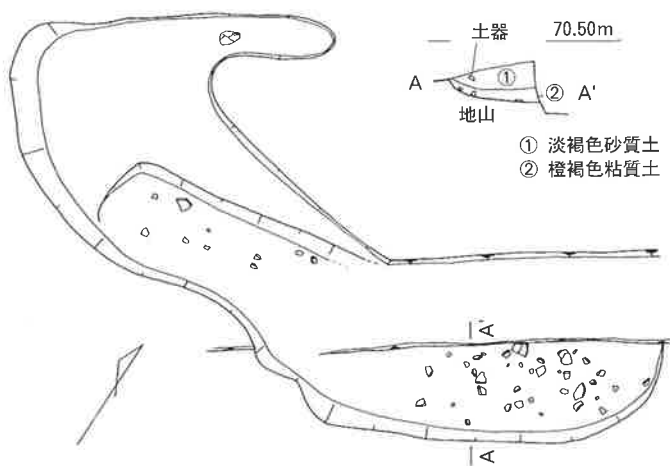
ここで唯一遺物をともなった遺構は、試掘調査時に検出されていた土壌S K01である（第4図）。ほぼ中央に試掘時のサブトレンチが掘られているため形状は明確でないが、復原すると下端での法量



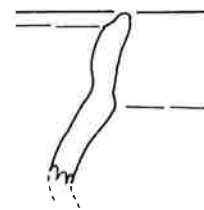




第3図 B地点調査成果図



第4図 土壙SK01平面図および遺物出土状況



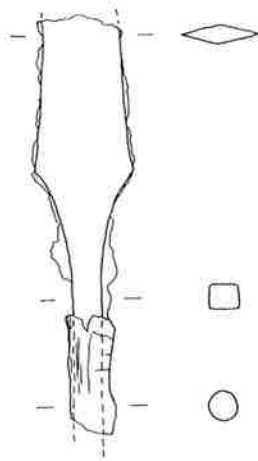
第5図 土壙SK01出土土器  
実測図 (S=1/2)

は長さ約3m、幅0.7mを測る隅丸方形の土壙である。伴出遺物は古墳時代中期の土師器（第5図）で、底面からの出土が多かったが、かなり浮いたレベルからも出土した。土器を観察すると、複数の個体が存在し、破片の様子から故意に破碎されているかのような印象を受けた。

### 小結

A地点は、推定されていた古墳は存在せず、時期・性格ともに不明の溝状遺構2本と土壙2ヶ所を検出した。尾根上から出土した須恵器片は、今回の調査区外西方に7世紀後半の遺構が存在することから、それに関連するものと思われる。

山城に関連する遺物、遺構は全く検出できなかった・トレンチの土層で確認した傾斜畑はかつての



曲輪のなごりかとも考えたが、伐開後の北側の地形を観察すると、非常になだらかな傾斜地となっており、東側にいくほどA区尾根との比高が低くなり最東端では比高0となっている。このような場所に曲輪を築く理由は考えられず、単純に段々畑の痕跡であると解釈する。ただ、南側斜面は非常に急峻で深い谷となっており、西の谷に存在した大野氏の館を防御する自然の要害であった可能性は十分に考えられる。

B区も推定されていた古墳は存在せず、古墳時代中期の性格不明土壌1ヶ所のみを検出した。この土壌は単独で存在しているため、その性格を推測するにはもっと広い範囲での遺跡の広がりを調査する必要があると考える。

第6図 鉄鍬実測図  
(S=2/3)

付記 犬丸遺跡B地点から約150m南方の工事中道路上で鉄鍬1点を表採した(第6図)。そこは本堂古墳群の東側斜面にあたり、工事中道路造成地またはその周辺の採土地に古墳があったものと思われる。表採地周辺に2ヶ所トレンチを掘ってみたが、古墳は発見できなかった。

鉄鍬は、工事中に刃部の先端を失っているが、刃部はおそらく柳葉形で、撫閔のタイプである。全長は不明、最大幅1.9cmを測る。残存状況は良く矢柄先端の一部が錆着して残っている。

(江川 幸子)



A地点 調査前遠景(北より)





A地点 SX01 完掘状況



A地点 西側段状遺構セクション





B地点 調査前遠景（北より）



B地点 調査後全景（北東より）



## 渋ヶ谷遺跡群（措松遺跡）

渋ヶ谷遺跡群は、松江市上乃木に所在する総合運動公園南東の3つの低丘陵上に位置している。過去に2度ばかり、開発計画に伴うトレンチ調査が行なわれており、遺構、遺物の存在が確認された箇所もある。当該地の有効活用のため、総合運動公園隣接地用地文化財発掘調査事業として、平成13年度から調査を行ったものである。14年度は、最も南側に位置する丘陵頂部から北東斜面を調査した。

検出した遺構は、近世後期以降の道路跡、奈良時代またはそれ以降の大溝、大溝と切り合う大溝造成以前の小さな溝状遺構、連続ピットを持つ道路状遺構などである。

遺物は、近世道路上から寛永通寶や布志名焼の破片、その他の道路状遺構や溝状遺構から奈良時代頃の須恵器片が出土している。

この遺跡では、尾根筋からやや下がったところに、奈良時代頃の幅の狭い道路状遺構や溝状遺構が何度も作り直された形跡が見える。歴史地理学上、この丘陵は古代山陰道の想定地になっているが、古代山陰道は計画的に作られた幅の広い道路とされており、その痕跡は今のところ判然としてはいないのが調査の状況である。ただ、近世にはかなり幅の広い道路として使われていた痕跡が見える。

大溝については約3分の1を調査したところであるが、いまだその用途を確定するには至っていない。しいていえば、大溝内の堆積土下部にやや硬化した面がみられる箇所もあり、これが解明の糸口になるかもしれない。次年度も引き続き調査が行われる予定である。 (瀬古 諒子)



遺跡近景（連続ピットをもつ道路状遺構）（西から）



# 田和山遺跡群

田和山遺跡群は、松江市乃白町地内の小高い丘陵地に位置する弥生前期末～中期・古墳前期～奈良・平安時代の遺構が確認された遺跡群である。今年度からは、本遺跡群の主となる弥生前期末～中期の環壕遺跡（国指定遺跡）の保存整備がおこなわれている。

発掘調査は、平成9年度からほぼ継続しておこなっており、早くも今年で6年目を迎えることになったものである。

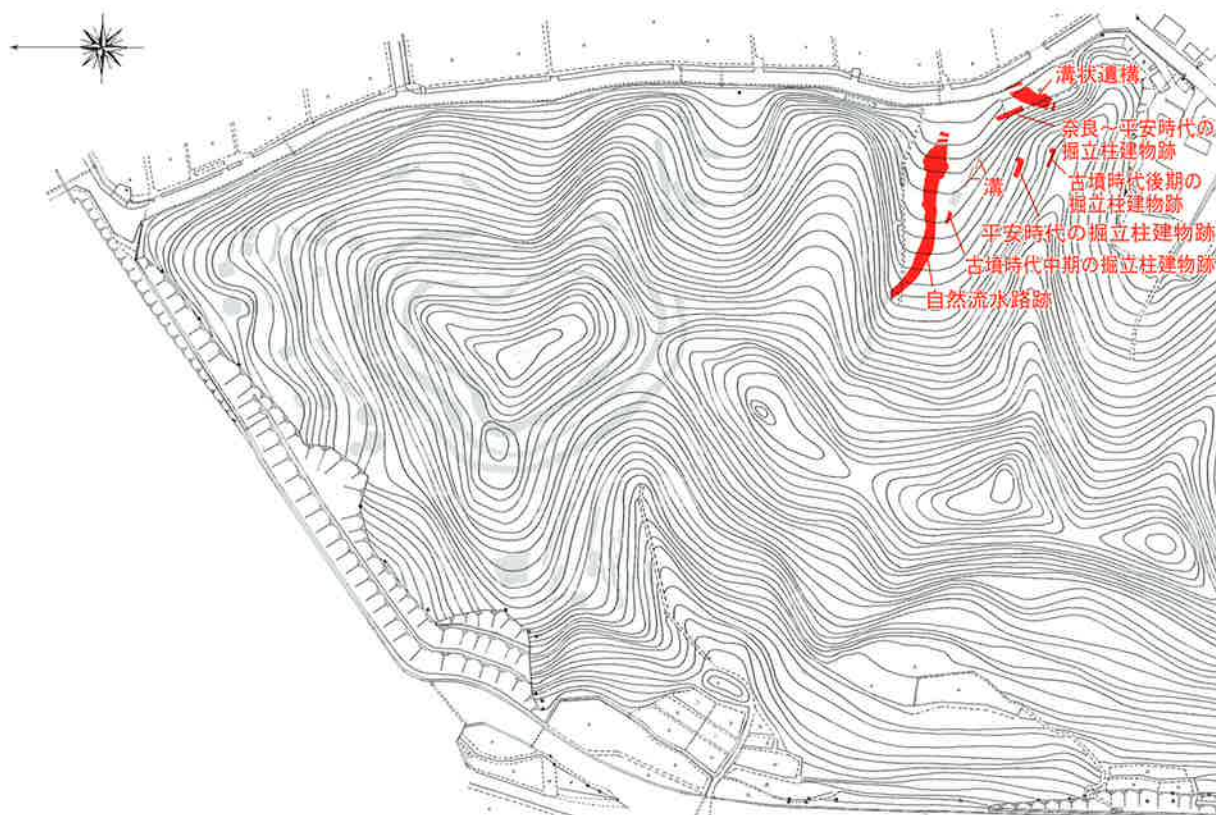
本年度は、本遺跡群南東の南丘陵東向斜面の裾に位置するA遺跡と呼称する区域を7ヶ月かけてその詳細な発掘調査をおこなったものである。検出した遺構は、遺物を包含する自然流水路跡1条・掘立柱建物跡6棟・溝状遺構1条・土壇1穴・溝2条を数える。

以下、これら検出した遺構の詳細を一部述べるものとする。

## 遺構の概要

今年度検出した自然流水路跡は、平成13年度の調査で検出した湧水等によって作られた自然流水路の続きであり、調査区のほぼ中央を地形の傾斜に従って西から東に流れた形で検出している。深さは約2mで、断面形状はV字に近い逆台形状を成しているものである。また、堆積土は多数の遺物を包含しており、土器片・石製品を合わせコンテナ約30箱ほどが出土している。

この自然流水路跡は土層断面及び埋土中の遺物の観察から、古墳時代中期までと古墳時代中期以降～平安時代までと大きく分けて2期の時代に別かれてその形状・レベルを変化させ流れていたことが



田和山遺跡群 遺構位置図 (S=1/2500)

確認できている。

埋土中の遺物の詳細は、最初の流れ跡の堆積土から、古墳時代前期～中期の土師器の壺・甕・高坏・鼓形器台、須恵器の把手付碗、耳環、有孔石製円盤、筋砥石、碧玉・玉髓片等が出土している。筋砥石は、平成9年度A遺跡調査で多数出土したものと同じく、結晶片岩製のものである。次期の流れ跡の堆積土からは、奈良・平安時代の壺・碗、須恵器の甕片・碗、土錘等が出土している。また、流水路跡堆積土上層からは、平安時代の須恵器の平瓶、水晶の平玉未製品が出土している。その他、出土土層は不明ではあるが、頸部に突帯が回る古墳時代前期の壺、古墳時代中期の須恵器の甕、紡錘車、砥石等が出土している。なお、調査区東端の現駐車場前の流水路跡最下層である青灰色土中から弥生時代中期の甕と底部片が1個体ずつ出土している。

掘立柱建物跡は、古墳時代中期1棟・古墳時代後期2棟・奈良～平安時代1棟・平安時代2棟を今回の調査で検出している。

このうち、古墳時代中期の掘立柱建物跡は、平成9年度の調査で確認した古墳時代中期の玉作工房跡の北西側で検出したものである。建物規模は、北側の遺構面が消失している為、詳細はわからないが、2間×1間以上のものである。遺物は、遺構面上から土師器片と須恵器片が、柱穴から土師器細片が出土している。

古墳時代後期の2棟の掘立柱建物跡は、重複（新旧）関係にある建物跡であり、いずれも2間×1間以上の規模をもつと推測されるものである。遺物は、埋土の上層から陶磁器片と竿秤（部分）？が、下層から土師器の甕片と古墳時代後期の須恵器の坏蓋が出土している。また、この遺構北側の斜面上の暗黄褐色土中から古墳時代後期の須恵器の高坏、玉髓が出土している。

奈良～平安時代の掘立柱建物跡は、地山面を平坦にカットして作られた建物跡である。加工された壁帯の際には溝が作られており、これに沿う形で小形の柱穴が並ぶ形で検出している。建物規模は、柱穴の検出状況から3間×1間以上の建物であったと推測されるものである。遺物は、溝内から奈良～平安の土師器の甕片、黒曜石片、遺構面一層上の埋土中から土師器片が出土している。

平安時代の2棟の掘立柱建物跡は、同じ遺構面にて検出したことから、先述の古墳時代後期の掘立柱建物跡と同様、重複（新旧）関係にある建物跡と推測されるものである。建物規模は、柱穴の検出状況から4間×1間以



自然流水路跡





奈良～平安期の掘立柱建物跡

上と3間×1間以上のものであったと推測される。遺物は、埋土中より土師器片、須恵器の甕片、古墳後期の須恵器の坏蓋片、平安時代の土師質土器の坏片が出土している。

溝状遺構は、平坦面を分断する形で検出した大形の溝である。断面形状は、緩い半円形状を成すもので、調査区外である東側の急斜

面で終わるものと推測される。この溝状遺構内、及びその周辺においては柱穴等の遺構は確認されなかったが、この埋土から炭・焼土と混じって礫・陶磁器等の遺物が数多く出土している。遺物の詳細は、18世紀の肥前のコンニャク印判が押印された染付皿、布志名焼の片口・底部に文字が書かれた椀（現時点では解読不能）、染付盃、すり鉢、砥石、寛永通寶（古寛永）、直径（実寸）1.2cmの火縄銃（三匁筒）の玉等である。

溝2条は、玉作工房跡と同一の平坦面にて検出したものである。

このうちの1条は、平成9年度の調査で確認した古墳時代中期の玉作工房跡と隣接する溝であり、一部、玉作工房跡調査時に検出されていたものであった。この溝は、その存在する遺構面が平坦に加工されていることから、建物跡に伴う溝であったとも考えられたが、柱穴の規則性が認められなかった等、建物跡と断定するには至らないものであった。このことから隣接する玉作工房跡の作業スペース等、なんらかの建物以外の使用をされていたとも考えられなくもないが、推測の域をでないものである。遺物は、溝埋土中から土師器片が1片出土している。

もう1つの溝は、壁際に作られていたことから壁帯溝であったものとも考えられる。前述の溝と同様、建物跡とも想定されるが、柱穴は検出出来ず且つ遺構面が一部消失しているため、詳細は不明である。

## まとめ

今回調査した自然流水路では、形状・レベルは変化させるが、検出したそれぞれの建物跡の存在時期には水の流れを確保していたことがわかっている。このことから、このA遺跡の谷は古墳時代前期～平安時代までの長い間、湧水等の水の確保ができる、当時としては住居域に適した場所だったと推測されるものである。

今回の調査によってA遺跡の谷の全容をほぼ明らかにすることができたことは、当遺跡群の様相を考える上で大変貴重なものとなったと考える。（落合 昭久）



# 法吉遺跡

## 調査経緯

法吉遺跡は松江市法吉町～春日町地内に位置する。市道東春日生馬線の道路拡張に伴い、平成12年度から13年度まで発掘調査を実施してきた。また、14年度にはこれまでの調査をまとめた発掘調査報告書を作成した。このうち、13年度に調査したI区とJ区では古墳時代～古代の土器・石器・木器が比較的多量に出土した。そのため、当初は調査範囲外であったJ区南接地（旧矢田邸）の調査の必要性が生じた。

そこで、松江市教育委員会と市土木課とが協議を行い、旧矢田邸地170㎡をK区と呼称し、15年度3月に調査を実施することになった。調査の方法については平成12・13年度の方法（調査区は法面を40度に設定し、掘削を行なうが、包含層までは重機で掘削し、包含層は人力で掘削すること）を踏襲した。

## 基本層序と出土遺物

基本層序は以下の通りである。GL-1mまでは比較的厚い盛土が見られる。その下に層厚0.3mの灰色粘土層（旧耕土？）が堆積し、更にその下が有機質が混じる暗茶褐色の粘土層である。

出土遺物の概要は次の通りである。盛土にはプラスチック・ガラス片が混じっていた。その下の灰色粘土層からは黒曜石・土師器・須恵器の碎片に混じって中・近世以降の播鉢、肥前系磁器、その他陶器類が出土した。また、漆器1点の出土も見た。その下の暗茶色（含有機層）からは黒曜石・弥生土器・土師器・須恵器、数点の木製品が出土した。次頁写真の木製品には中央に小さな穿孔が認められる。包含層の下には灰色砂層、オレンジシルト層などの無遺物層（地山？）が続く。

以上の包含層出土遺物は点数ではコンテナ7箱程度と比較的多いものの、いずれも極めて碎片で形態の明らかなものは極めて少ない。また、ローリング等を受けて磨耗しているものが多い。

## 検出遺構

本調査区の北に接するJ区では多量の自然木に木製品が混じっている状況が認められた。その堆積状況から沼状の湿地を想定しており、南隣のK区においても同様の状況を想定していた。

しかし、調査の結果ではJ区より、むしろI区に類似しており、木製品等の有機質は少なく包含層が水平堆積しローリングを受けた土器の細片が比較的多く出土した。そのため、沼状の湿地の南限を確認するため、調査区を可能な限り北に拡張した結果、K区の北端において有機質が集中して検出された。そのため、これを沼状湿地の南限と判断した。

その他、近現代のものと思われる暗渠や杭列が検出された。特に杭列は幅20cm、長2mを測り、等間隔で打たれている。杭は現代の盛土に上部を切られており、少なくとも中・近世以降の灰色粘土層より上から打ち付けられていた。その位置等から近・現代の家屋に伴う基礎杭であると考えられる。

## まとめ

平成15年度の調査は北接するJ区と同じく木製品等の出土を想定して調査を開始した。しかし、J区で見られた沼状の湿地はJ区とK区の接点付近で終わっていることが明らかになった。それより南は暗茶褐色粘土（含有機質）や灰色粘質土が堆積していた。出土遺物は暗茶褐色粘土が黒曜石・弥生土器・土師器・須恵器であり、8～9世紀前後までは低湿地の状況が自然堆積したものと思われる。出土遺物はほとんどが辺5cm未満の碎片で、ローリングを受けており現位置を保っていない可能性が高い。その上は中・近世以降の陶磁器を含む灰色粘土が水平堆積しているが、同層の出土遺物も土師器・須恵器等の微細片を比較的多く含んでいる。

以上のことから、K区は低湿地等に遺物が包含されたものと考えられる。沼状湿地南限の他は明確な遺構はなく、近現代の杭列や暗渠などが見られるのみであった。しかし、微細片ながら、遺物量は比較的多く今後の周辺地域の調査成果を待って検討する必要があるだろう。 （藤原 哲）

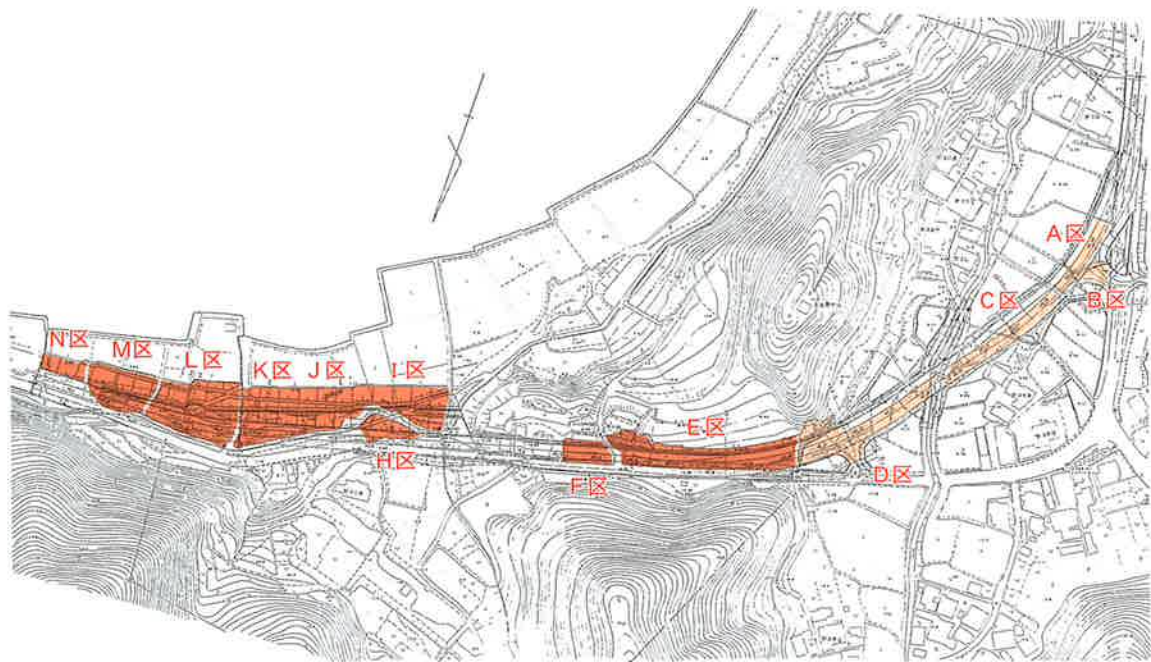


法吉遺跡 出土木製品

# 山津窯跡

## 調査経緯

山津窯跡は松江市大井町に位置する。県道本庄福富松江線大海崎工区（大井）道路改良工事に伴い、平成13年度から発掘調査を実施している。調査区は道路拡張予定地の西からA区、B区、C区…と呼称し、13年度はA～C区を、14年度はD～F、H～N区を行なった。



山津窯跡発掘調査 位置図



## F区

F区の基本層序は以下の通りである。GL-1～1.5mまでは黄褐色の盛土、その下は層厚0.25～0.4mの明黄褐色土・層厚0.1～0.9mの橙色土が堆積する。これらの下が灰褐色の包含層で0.1～1.5mほどで無遺物層に至る。各層厚に大きな差が見られるのは、調査区内の旧地形が全体的に東へ向かって緩やかに落ち込み谷状の地形を形成していたためである。そのために包含層も東に厚く西に薄い。無遺物層も同じく東へむかって深度を下げるがこれら無遺物層の中には地質的鑑定の結果、始良火山灰層（AT層）と指摘を受けた灰白色シルト層が見られる。

調査は盛土直下で1面、包含層で2～4面の面的調査を実施した。1面では須恵器片を除いて顕著な遺構・遺物はなし。2～4面では溝、土壇等の遺構を検出した。それらの中には石列や土器片や小礫を敷き詰めた遺構（小道?）がある。出土遺物に関しては2～4面とも8世紀後半～9世紀代のも



のが主体であり、かつ、各面における時期的まとまりは認められない。また、包含層の覆土には周辺地に分布する和久羅山系の岩石類が多数含まれている。そのため、元来、谷底地形であった所に包含層が堆積し、一部で（8世紀後半～）9世紀に幾つかの遺構が形成されたものと考えられる。むしろ、各遺構面は平面的に捉えるのではなく、総合的に判断したほうがよいであろう。



F区 土器敷遺構（小道？・9世紀）

#### H区

H区は中海に面する標高8～9mの緩やかな丘陵斜面に位置する。調査区内は北東に高く、南西に傾斜しており、北東隅部では表土直下で須恵器窯（山津1号窯）を検出した。調査区南西では表土直下で黒色の灰原が広がっている。

山津1号窯は主軸をN-65°Eにとり、残存長6.2m、幅2.3mを測る。検出した床面は1枚であったが、最終床面直上からは6世紀末～7世紀初頭の坏がセット関係でまとまって出土した。特に坏の蓋を下、身を上にかぶせた状況で検出している。その他、床の中央部には青色砂層の堆積、燃焼部付近で舟底状土壟を確認した。

窯の下に広がる灰原は大きく分けて2層あり、上層は1号窯灰絶後、7～8世紀に堆積したもので、鷗尾片1が出土している。下層は6世紀末～7世紀初頭、山津1号窯床面資料と同時期であり、位置的にみても1号窯に伴うものと考えられる。

（藤原 哲）



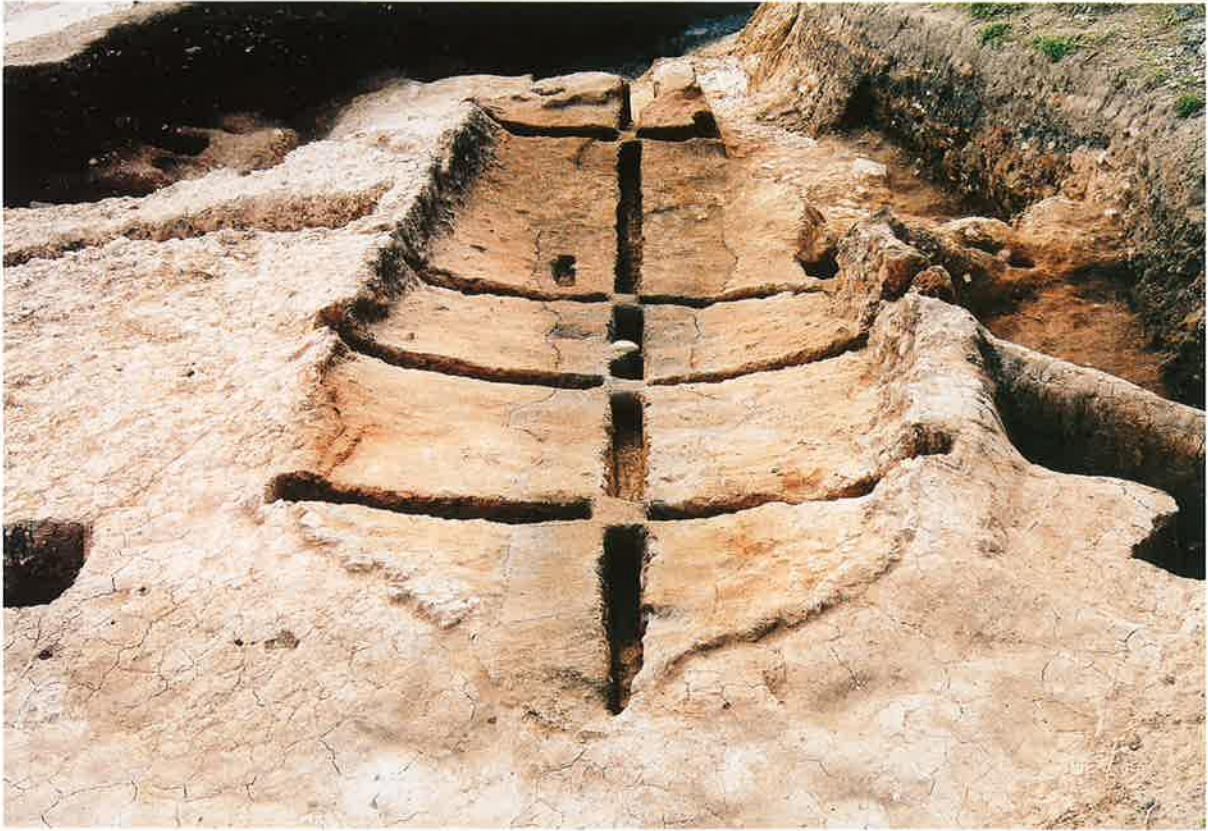


F区 遺物出土状況



H区 窯跡検出時全景 調査区左奥に1号窯、その下には灰原が広がる。右は中海。





H区 山津1号窯全景（西から）




1号窯床面遺物出土状況

## I 区

I 区は、調査前3段の畑と水田であった。山津1号窯の南西の斜面に位置する。耕作土以下地山までの堆積土層には、多くの遺物が含まれていた。

I 区では、溝状遺構4本、土壙4基を検出した。溝状遺構4本のうち1本は残存長9.5m、幅0.8~1.6m、深さ10~60cmの北から南に流れる溝であった。溝の側面には、土留めのためと思われる石が並べられていた。埋土からは瓦や磚、7世紀から8世紀代の土器が出土している。

出土遺物の多くは甕片、蓋坏類であるが、水田の堆積土層からは、大きさ15×12cm、厚さ3.2cm、突帯が施された陶棺片も出土している。その他には、硯か壺の脚と思われる獣脚や須恵質で形状は球状、吊り下げの孔の開いた突出部をもつ錘も出土している（重さ 33.15g）。錘は7世紀末から作られ、I 区から出土した錘も形状からこの時期のものと考えられる（小松市教育委員会 望月精司氏のご教示による。）また、舟形で片方に孔の開いた取っ手のついた遺物（)も出土しているが用途は不明である。

窯跡が近くにあるため、堆積土層からは多くの6世紀末から8世紀後半にかけての遺物が多く出土した。遺物の中には溶着したもの、変形したものも多くまた、窯体（窯壁塊）も数多く出土している。

I 区周辺には山津1~3号窯が存在し、窯関係の遺物も多く出土している。錘や獣脚などはこれまでの周辺の遺跡調査でもあまり発見されていないため、山津窯の工人によって作られたものであろうか、大変興味深い。

(廣濱 貴子)



錘



陶棺片



獣脚



## J区

J区上段は、中海方向に張り出した丘陵の先端部で、標高5mを測る。

調査はまず表土(畑土)の除去から開始した。表土の厚さは10~15cmと非常に薄く、多量の須恵器片を包含していた。表土直下は硬い礫層で、その面で4号窯右壁にあたる被熱粘土の帯を検出した。窯体の外縁にめぐる被熱粘土の平面プランを出すため精査をおこなったが、幅5cm強の被熱粘土帯の長さは3.8m以上は検出できず、左壁に関しては全く検出することができなかった。この理解しがたい事実を解明するため、窯中軸の想定ラインと直交する方向3ヶ所に畦を設定し、窯床面までの掘り下げをおこなった。その結果、窯の中に多量の土器片を包含した炭層が左下がりに堆積し、非常に不自然な様相が観察された。また、床面は1㎡程度残存していたが、それ以外は床面が無く地山が露出しており、この地山は本来であれば左壁が存在する方向に向かって高まっていた。

右壁窯壁が3.8mでぷつぷつと切れること、床面が一部しか残存しないこと、左壁窯壁が存在しないことから、中村唯史氏に地質の方面から意見をうかがった。中村氏は、セクションで床面がせり上がった逆断層の痕跡が見られること、および全体の状況から、もともと高いレベルの急傾斜地にあった窯の一部がなんらかの原因ですべり落ちて現位置に移動し、左壁窯壁等は原位置にとどまっている可能性が高いことを指摘された。4号窯は登り窯であるはずなのに、床面にほとんど傾斜が見られないこともこの指摘によってうなずけるものとなった。

4号窯が操業されていた時期については不明である。窯体内の炭層に8世紀前半の土器が大量に含まれていたことから、8世紀前半以前であることは確実である。ただ、4号窯右側窯壁が上方からすべり落ちたものだと考えると、窯体内の炭層は4号窯の灰原が入り込んだものである可能性も考えられ、そうであるとすれば8世紀前半の窯であるかもしれない。ちなみに、J区上段からは表土中を含めて8世紀前半の土器しか出土していないことをあげておきたい。

4号窯右壁の約4m西では、S字形の被熱粘土の帯を検出した。被熱粘土の帯の形状、南側に炭層が広がることから、窯の焚口付近かと推察され、これを5号窯とする。被熱粘土の帯は右側のみの検出で、左側は存在するとしても調査範囲外にあるものと思われる。焚口南側の炭層からは8世紀前半の須恵器が出土しており、その頃迄操業が行なわれていたと思われる。

J区下段の低地にもトレンチを設定して調査をおこなった。標高は約1mである。

土層堆積状況は、いずれも濃灰色砂質土の上に砂礫層が堆積し、その中に波に洗われて割れ口が風化したような須恵器の破片が少々混入していた。その上は干拓によって客土された耕作基盤土、耕作土である。窯操業時の汀線を確認することはできなかった。

(後日談) J区上段では、4号窯の右壁のみが検出され、これは原位置を保つものではなく北東方向の高い場所からすべり落ちて現位置に移動したものと解釈された。この付近一帯が地滑り地区とはいえ、本当にそんな事が起こりえるのだろうか、内心半信半疑の気持ちはぬぐえずにいた。

そんなおりの調査終了後、大豪雨があり、J区から東約100mの地点で実際に地滑りが発生した。その滑り方は、電信柱が立った状態で地面とともに低い方に移動する状況であった。この状況を目の当たりにした時…4号窯の検出状況がうなずけるものとなったのである。(江川 幸子)



4号窯検出状況



4号窯右壁と地山との関係（地滑り状況）



## K～N区

K～N区は北側を畑として、南側を水田として使用されていて、トレンチ調査を行った。そのうち遺構が確認できたのはL区の上段の1ヶ所だけであった。

南側の水田は耕作土の下に直径10cm大の礫を含んだ層が堆積し、その下には細かい粒子の砂質土層が堆積していた。この砂質土層は中海の海砂と考えられ、昔は中海が現在の水田付近まで広がって、後世になって埋め立てて耕作地として使用したと思われる。中には砂質土が検出されないトレンチもあることから、北側にある丘陵が所々中海に向かって伸びていたと思われる。この水田部分から遺構は検出されず、遺物も表土中もしくは表土直下から須恵器片がわずかに出土するだけであった。

北側の畑部分は水田部分より一段高い所に作られていた。盛土によって高くしたり、丘陵を削平して水田を作っていた。K区では褐炭層と思われる黒色土層が見られるものの、遺構はなく遺物も出土しなかった。それ以外の調査区でも遺構は確認されず、遺物も須恵器片がわずかに出土した。

L区上段は約10m四方の緩斜面で、土壙1基（SK-01）・溝状遺構1条（SD-01）が確認された。SK-01はほぼ中央で検出され、長軸140cm、短軸110cm、深さ30cmを測る不整隅丸方形の土壙であった。覆土中からは須恵器片や10～30cm大の石が出土したが、時期を決定付けるまでには至らず、用途についても不明である。

SD-01はSK-01の北側から検出され、SK-01を囲むような形をしている。長さは4m以上、幅30cm、深さ10cmを測る。検出面から須恵器の甕片が、覆土中からも須恵器片が出土したが、時期を決定付けるまでには至らず、用途についても不明である。

双方とも時期を決定付けることはできなかったが、双方が重なっているためその切り合い関係から前後関係を推測することができる。SD-01を切り込むようにSK-01を作っていることから、SD-01の方が古いと考えられる。

これらの遺構を検出した層の下には炭もしくは炭化物を含んだ層が確認されており、今後調査が進められる。

（石川 崇）



L区 SK-01・SD-02 完掘状況